

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2019年4月6日
文責：JUN

教師はなぜ「やり方」に走るのか？

1 「学び合う学び」への最初の一步

4月、新しい年度の始まりである。毎年のことだが、多い少ないはあるけれど、その年度から新しく訪問する学校がある。すべて「学び合う学び」による授業づくりに取り組もうとしている学校である。うれしいことだ。ただ、それらの学校においては、子どもたちの協同的学びが必要だと考えるようになってきているのだけれど、その実現に苦慮していることが多い。だから私の訪問を希望してくださったのだから私はそれに応えなければならない。

これまでずっとかかわってきた学校においても、人事異動によって新しく着任してこられた人のなかに協同的学びへの転換で戸惑っている人がいる。私が何年もかかわっている学校は「学び合う学び」への取り組みを継続してきているわけだから、前からいる人は学び合いのある授業をしているし、そういう授業で学んできた子どもたちは仲間と普通にかかわり合っていて学んでいる。そういう環境のなかで、新しく来た人が、これまでの自分の授業とは異なる状況を肌で感じ、いわばカルチャーショックのような感覚を覚えても不思議ではない。ある意味、学校全体が新しく始める学校の教師たちより、そういう教師のほうが焦りは強いかもしれない。

そういう学校の皆さんに言いたいのは、学校全体が「最初の一步」の場合も、個別の教師の「最初の一步」の場合も、そこで生まれる戸惑い、疑問、困惑は大切にしなければならないということである。私は、子どもの学びについて、すでにわかっていることを繰り返すだけではそれ以上のものは出てこないけれど、異質なものととの出会い、わからなさとの出会いは、これまでにない学びを生み出す、だからすぐにはできないこととの出会いほど大切なものはないと述べている。それはそっくり教師の授業づくりにもあてはまる。「学び合う学び」と出会った際の戸惑い、疑問、困惑が目覚めるような実践への入口なのだ。

その入口から中に入っていくということは、とにかくやってみる、取り組んでみるということだ。やってみなければ何事も始まらないのだから、最初からうまくいくはずがないと言いついて聞かせて、こういうことではないかと思うことから始めることである。

そのとき、ほとんどの教師は、「学び合う学び」とはどういう授業を言うのか、そしてどのような「やり方」をするのだろうと考える。その気持ちはよくわかる。しかしそう思った後の行動は、教師によっていろいろである。同僚の授業を見てとにかく見た通りやり始める人、「学び合う学び」の実像が理解できないと始められないと書物を読んで研究し始める人、そのうちどうにかなるだろうと急がない人、なかには違和感を抱いて拒絶してしまう人というように。どの人がどうなるかは、その人のそれまでの教師としての経験による子ども観、授業観によるし、人間だからそこに感情的なものが

入り込むこともある。ただ、「やり方」に性急に走るのはいいことではない。

2. 性急に「やり方」に走らざるを得ない事情

学校訪問を始めて15年、その間、いろいろな学校を訪問してきて思うのは、どういう過程をたどるにしても、いつまでも「やり方」という型の域から脱することができないと「学び合う学び」は進展しないということである。どんなことでもそうだが、物事は意味なく型があるのではない。その型が必要になるわけがあるし、その型をつくり出した人の考え、熱意がある。だから、型、つまり「やり方」が成立する背景とか一つひとつの所作の持つ意味に思いを及ばさないで、ただ「やり方」だけを真似ても、生まれてくるものは似ても似つかないものになる。

それにしても、教師は、なぜそのように性急にやり方に走ってしまうのだろう。

その原因として考えられるのは、結果を出すことを急がなければならない事情があるということである。職人が技を身に着けていくのに5年、10年という期間を費やすのは普通のことである。しかし、教師の場合は、一日でも早くと考えざるを得ない。それは、一年目の教師も、十年も二十年も教師をしてきた人と同じように学級担任をし、授業をしなければならないからである。しかもそのどちらの教師の指導を受けるかを子どもには選べない。こうして経験の浅い教師も、ベテラン教師と同じように、子どもたちの二度とないその一年を担当することになる。だから、教師たちは、良心的になればなるほど、一日も早く「よい授業」のできる教師にならなければならないと思うのである。こうして教師たちは「やり方」に走ってしまうのだ。(本稿の趣旨とは異なることだが、子どもにとって経験の浅い若い教師の指導を受けることは、ベテラン教師とは異なる魅力と良さがある。私は、伸び盛りの子どもとともに伸び盛りの教師になって精一杯の取り組みをすることは、素晴らしい教育だと考えている。若い教師は若い教師なりの良さを発揮できる)

もう一つ、教師を「やり方」に走らせるものとして思い当たることがある。それは、教科書通り授業をするべきという風潮である。もちろん、教科書は、学習指導要領の具現化を図るべく、専門家の見識と実践者の経験を生かして作成されたものである。国の検定も受け、無償配布されているものである。だから、教科書をないがしろにして授業をすることはよいとは言えない。しかし、それは、教科書に記載されている内容を研究せず、それがどういう学びなのか、そしてどこが重要点であり子どもはどういうところをつまずくのかといったことについて深く把握することなく、ただ、教科書に書かれていることを順に子どもにやらせていけばよいということではない。

どんなに素晴らしい材料であろうと、どんなに優れた道具であろうと、その材料にはどんな特質があるのか、その道具がどのように作られているのか、その材料や道具は今からどのように活用しどのような段取りで製作していけばよいのかといった材料や道具にまつわる諸々の事柄に思いを馳せ、夢中になって取り組んでこそ、その材料や道具の良さが発揮されるのである。そういうことからいえば、教科書をよく研究しないで、記載されていることを記載されている順に教える授業は、よく知りもしない材料や道具を使って製作しているようなものになってしまう。

どんな仕事でも、よい仕事をする人は、材料や道具にこだわり、その材料や道具の良さはどのようにすれば生きてくるのかと考えている。つまり授業におけるやり方も、やり方に性急に走る前に、学びの対象の内容をさぐり、その対象で学ぶ子どものことに思いを馳せることだ。そのうえで、さあ、どう授業しようかということになる。それは、学びの対象が教科書の内容であっても同じことだ。つ

まり、教科書教材であろうと、教師が探し出した教材であろうと、ただ、教科書通りにやればよいということではないのだ。そこに授業をする教師の「手づくり感」がなんとしても必要だということなのだ。

教師の仕事は多岐にわたっている。何人もの子どもを対象とする仕事は、繊細な心遣いも必要だ。いつも子どもに対して気を配っていなければならない。もちろん、子どもたちには保護者がいて、その保護者との連携にも努めなければいけない。また、学校を取り巻く地域とのつながりもある。そういう一つひとつへの対応をしながら、教師の本分である授業をこそよりよいものにしなければならない。考えてみれば、教師はかなりの仕事量をこなしている。

私もそうだったけれど、子どもの笑顔が励みになり、子どもがよりよく成長していくことが喜びになり、教師は教師の仕事にやりがいを感じている。忙しいし、子どものことで悩んだり、考え込んだりすることがあっても、基本的には教師であることに後ろ向きにはならない。もちろん、こんなに忙しくなければもっと出来ることはあるのではないかと思うことがある。だから、教師に対しても働き方改革ということが言われるようになり、過重労働をなんとかしようという動きが出てきていることはありがたいことである。少しでも、忙しさが減少し、最も大切な一つひとつの授業に時間も労力もかけられるようになったらと心から思う。そうなれば、前述した「手づくり感」を出すということももっとも可能になる。そういう期待も込めて、今は大変だけれど、完璧さを目指さなければと思わないで、できる限り「手づくり感」が出るよう心掛けるとよいのではないだろうか。

教科書通り、順に教えるという考え方ではなく、授業題材についてできる限り考えてみる、そして、それを学ぶことになる自分の学級の子どものことに思いを及ばせ、題材と子どもとを結びつけてみる、そのとき、どういう結び付け方をすれば、子どもは学びに意欲的になれるか、そして、学びを深めていけるか、それが「手づくり感」だ。ここで生まれ出るのがやり方なのだ。それは、これまでに知っていたやり方の場合もあるだろう、そうではなく、こうやってみたらどうだろうと新たに浮かび上がるやり方の場合もあるだろう。

とにかく、教科書通りという授業から抜け出ることが肝心である。

3. 「やり方」主義から脱却するには

話を「学び合う学び」への授業転換に戻そう。

ある中学校でのことである。立ち上げに際して、どの教科の授業においても、グループで学び合うという形態を入れていこうという共通理解をした。つまりグループを取り入れるというやり方を導入したわけである。その学校の取り組みがもしそれだけで進んでしまったら、それは必ず頓挫しただろう。そうではなくこの学校の子どもたちの学びは飛躍的によくなっていった。どうしてだろうか。

それは、グループを取り入れた授業を参観して検討する授業研究を頻繁に実施したからである。参観する教師のだれがどのグループを観察するかという割り振りもして、グループ内でどういう学びが生まれているか、どういうグループの学びが素晴らしいか、どういうところは改善しなければならぬか、それを観察して見つけ出し事後に検討したのである。

このことは、子どもたちの学び合いの事実をつぶさに見つめることとなった。つまり、グループで授業をすればよいということではなく、グループにしたことで子どもの学びがどうなったのか、よい学び方だった場合はどこがよかったのか、逆に子どもの学びが滞った場合はどこに原因があったのか、

そこに注目し検討し合ったのである。そうなったとき、グループを取り入れるということは単なるやり方ではなくなった。グループを入れる学び方をしたかどうかという表面的なことではなく、学びの対象と子どもをみること、学びの対象に向き合う子どもの学びをみることになったのである。

教師の仕事はどうしてもやり方に走ってしまう。それがある程度仕方のないことだとしたら、この学校が実施したように、そのやり方によって行われた授業を、すべての教師で検討することである。そうすれば、それは単なるやり方ではなくなるし、当初始めたやり方も、そういう検討を経て、その学校の子どもの実態に合う実効のあるものへと改善されていくだろう。

一方、すでに「学び合う学び」を実践している学校に転勤し戸惑っている教師の場合で大切なのは、以前からいる教師たちが、転勤してきた教師に寄り添うことである。その教師が抱えている戸惑いや懸念・疑問がどのようなものか親身になって考えることである。

そして、大切なのは、「この学校はこういうやり方をしているからあなたもそうして行ってね」と言うだけで済ませないことである。もしそういう対応をしてしまうと、転勤してきた教師は、ただやり方を模倣するだけになる危険性がある。そして、よくわからないまま、本当にそうしたほうがよいという思いもなく、形だけの「やり方」踏襲をしてしまう。そうなったとき、子どもの学びは決してよりよいものならない。

ではどうするか。やはり、学校全体の立ち上げと同じように、授業の事実、学びの事実に基づくことである。転勤してきた人は前からいる人の授業を参観する、転勤してきた教師が授業を公開し皆で参観する、そして、そこで目にした事実に基づいて、どこで学びが生まれたか、どこで学びが滞ったかとお互い親身になって検討する。そうしたとき、前からやっていたやり方に存在していた意味が見えてくるし、そのやり方をさらに効果的にする留意点が見えてくるだろうし、また新しいやり方に気づくこともあるだろう。転勤してきた教師と前からいる教師が互恵的に考え合う営みが、それを可能にしてくれる、そして、学校長や研究主任はこういう取り組みが可能になるようなさまざまな配慮や働きかけをしていってほしい。

もう一つ大事にしてもらいたいことがある。それは、学校の授業づくりの核になる校長や研究主任が、何を指して「学び合う学び」にするのかという理念をもってもらいたいということである。個々の教師のなかには、授業でどうするか、あの子この子といった子どものことで頭がいっぱいになってしまう人もいる。そういう教師たちの懸命さを好ましく眺めながら、その教師の授業や子どもへの対応が形だけに終わらないよう、やわらかく、しかし力強く支えるのは校長や研究主任の役目である。そういう支える人に確たる信念があれば、それは確実にそれぞれの教師たちの授業づくりに波及していく。

「やり方」から始まったとしても、単なる「やり方」で終わらせないという心構えを皆で共通理解することが大切である。それには、やり方の奥にある大切なものがみえている推進役が必要だ。そういう人がいれば、はじめて取り組む学校も、転勤してきた教師も、落ち着いて信頼して取り組むことができる。

「学び合う学び」に取り組む学校になくてはならないのは、子どもをどういう学び手として育てるかという考え方である。それが存在する授業づくりは、方法だけでは生まれえない、そこに存在する理念によってよりよいものとして生まれ出るということは、だれもが理解できるにちがいない。

新しい年度が始まる。希望をもって船出したい。